
いがみの権太 ~ 義経千本桜より ~

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いがみの権太 義経千本桜より

【Nコード】

N 8 7 7 7 H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

源平の戦いの後。落ち延びていた平維盛の家族を源氏に売ろうとするいがみの権太。だが彼の真意は。歌舞伎の名作義経千本桜の一場面を小説にしました。

第一章

いがみの権太　　ゝ義経千本桜よりゝ

平清盛の長子は重盛といった。平家きつての出来物でありその度量も才覚も清盛をして平家の柱であると思わせるものがあつた。

その子が平維盛であるが彼は美男子として知られていた。だが平家滅亡後彼はその行方を絶ち生きているかどうかさえわからない有様であつた。しかし彼の正妻である若葉内侍は二人の間の子である六代連れて夫の行方を探していた。

美しい女である。楚々とした細長い顔立ちをしており目は実に麗しい。髪は黒く絹のようである。その子六代も両親に似たのである。う実に整つた顔をしている。その二人を前髪立ちの若武者小金吾が護つていた。

凜々しい顔立ちをした精悍な若者であつた。彼は二人の側を離れず始終護つていた。その一行は今大和の下市に来ていた。当然維盛を探してのことである。

「お父様はここにいろの？」

「そう聞いているけれど」

一行は今団子屋で休息を取つていた。若葉は其中で我が子に対して告げていた。

「この大和に」

「はい、どうやらそのようです」

小金吾が二人のその言葉に応えて述べてきた。

「維盛様に御会いできるのも間も無いです。もう少しの御辛抱です」
「わかりました」

若葉が彼のその言葉を受けて頷いた。

「それでは暫く休んでそれから」

「また発ちましょう」

こつした話をしていた。そしてそこに一人の若い男がやって来た。

髪は剃っておらずそのまま鬚にしている。服は町人のものである。はいているそれがいささか短く遅しいふくらはぎも見える。顔立ちは何処か目が鋭く左目の下に大きなほくろがありそれがかなり目立っている。

その男がやって来たのだった。そしてすぐに周りを見回しだした。そうしてそのうえで言うのであった。

「ああ、居たな」

「むっ、そなたは」

小金吾は彼の姿を見てすぐに立ち上がった。そうしてその手に持っている箱を差し出すのであった。

「よく戻って来てくれたな」

「お侍さん、それですよそれ」

若い男は明るい声でその箱を指差しながら言うのであった。

「その荷物。間違えて申し訳ありませんね」

「いや、それはいい」

小金吾はこのことはいいとしたのだった。

「それはな。それよりもだ」

「はい。それじゃあ」

まずは荷物を交換する。男は団子屋のその椅子のところで荷物を調べる。するとすぐにこう言いだしたのであった。

「！？ねえな」

「ないだど？」

「そうですよ。金がないんですよ」

あからさまに怪しむ顔で小金吾を見ての言葉である。

「金がね。どうしたのですかね、これって」

「まさかとは思うが」

小金吾はすぐに彼が何を言いたいのか察した。そうして眉を顰めさせて男に言うのであった。

「それがし達が盗んだとでもいうのか！？」

「いえ、そうは言いませんがね」

口ではそれは否定した。流石に相手が武士だからである。

「けれどもないもんはないんですよ。どういふことですかね」

「武家の者を怪しむというのか」

小金吾も武士だ。それに対して憤らない筈がなかった。

「ならばここで」

「お待ちなさい」

しかしここで若葉が立ち上がり二人の間に入った。

「奥様」

「小金吾、今は大切な時です」

まずはこう彼に告げるのであった。慌てたような顔で。

「ここで騒ぎを起こしては」

「しかしです。この者はどう見ても」

そうであつた。かたきであつた。武士としてそのような者に付け込まれることが我慢できなかったのだ。しかしそれでも若葉は言うのであつた。

「それでもです。見つかつてしまえば」

「くっ……」

齒噛みしたが仕方がなかった。小金吾は止むを得なく二十両を路上に投げ出した。男はすぐにそれを懷に入れると彼に顔を向けてにんまりとして言うのであつた。

「やっぱりありやしたね」

「貴様、よくもぬけぬけと」

また柄に手をやる。しかし男はさつと後ろに飛び退いてそれから言うのであつた。

「危ない危ない。じゃあ俺はこれだな」

そのまま何処かに去つて行つた。小金吾は今は苦渋に顔を歪めさせるしかなかった。

「世が世ならあのような輩に」

「それは言つても仕方ありません」

若葉がその彼に対して告げる。彼女も苦しい顔であつた。しかし

それでもであつた。

「だからもうここは」

「はい。行きましょう」

一行は落ちぶれた者の悲しさを味わいながら立ち上がり再び歩きだした。暫く路を進んでいると後ろから。剣呑な声が聞こえてきたのであつた。

「いたぞ！あそこだ！」

「あそこにいたぞ！」

「！？まさか！」

小金吾はその言葉にすぐに振り向いた。するとやはり彼等がいた。

「あれが若葉内侍だ！」

「子の六代もいる！」

「逃がすな！」

口々にこう言つて刀を手を追つてきたのであつた。小金吾もそれを見てすぐに刀を抜いた。

「ここは私にお任せを！」

「小金吾！」

「奥方様と若様は先へ！」

そして二人を先に行かせようとする。

第二章

「私の後から！」

こう告げて二人を先に行かせた。そのうえで追っ手に対して向かうのだった。

「ここは行かせん！」

「むっ、貴様は！」

「小金吾か！」

「ならばどうする！」

小金吾もまた退くつもりはなかった。

「私の首、手に入れるつもりか！」

「ぬかせ、では望むままにしてくれよう！」

「覚悟せよ！」

小金吾も追手達も既に刀を抜いていた。そうしてすぐに斬り合うのだった。

激しい応酬の後で追手達はこの場は退いた。小金吾はそれを見届けてから何とか退こうとする。しかしそれはできそうにもなくなっていた。

「くっ………」

既に傷を負ってしまっていた。しかもかなり深い。

見れば若葉も六代も既に姿を消している。彼はその目的は達していると言えた。

それを確認してまずは満足した。しかしであった。

彼はそのまま倒れ事切れてしまった。傷に耐えられなかったのである。だがここでまた一人道を進んできた者が出て来たのであった。一人の老人であった。彼は道を歩いていてその事切れている小金吾に気付いた。そうしてその顔を見てあることを決意したようであった。

「お許し下され」

詫びの言葉を出し左手だけの合掌をしてからそのうえで小金吾の持っていた刀を振るった。老人もまた何か思うものがあるようである。

この下市村ではある寿司屋が繁盛していた。客の出入りが激しく彼等は口々にこう言うのであった。

「ネタがいいんだよな」

「ジャリも選んでるよな」

「それに酢も効かせてくれててな」

寿司に必要なものは全て揃っているということである。

それだけでも繁盛しない筈がないがそれだけではなかった。この寿司屋にはもう一つ看板があった。その看板が何かというと。

店の娘お里であった。彼女の美貌と愛想のよさがまた客を集めていたのである。そしてこの店に最近もう一つ評判になるものがあった。

「あの若い衆だよな」

「ああ、弥助さんな」

その弥助という若い使用人も評判になっていたのである。

彼はかなりの美男子であり背筋もよく寿司屋の使用人とは思えない程気品があった。その彼の寿司屋の使用人らしからぬ気品や物腰も評判になっていたのだ。

「親父さんも気に入ってるのかね」

「そうだろ？」

このことはすぐに肯定された。

「あの名前あるだろ」

「弥助って名前か」

そのことも確認されたのだった。

「あの名前がどうしたんだよ」

「だからあれだよ」

この名前のことも話されるのだった。

「親父さんの名前は知ってるよな」

「弥左衛門だったよな」

これがこの寿司屋の主の名前である。

「それは知ってるぜ」

「若い頃の名前は弥助だったんだよ」

「弥助？」

「そうだよ、弥助だよ」

このことを知っている者は少なかった。弥左衛門も結構な歳だから彼の若い頃を知っている者もあまり多くはないのである。店に入りする客は誰も案外若かったのだ。

「その名前を襲名させたんだよ」

「自分の若い頃の名前をか」

「ああ、そうだよ」

このことが強く確認されるのだった。

「つまりな。親父さんはあの弥助さんをな」

「かなり見込んで気に入ってるってことか」

「その通りさ」

こう答えが出されたのだった。そして弥助はお里とその仲がかなりよかった。店の者達も客達もやがて彼等が式を挙げ店を継ぐのはと思っていた。

そしてここで。こうも言われるのだった。

「もつともなあ」

「あいつさえまともだったらな」

「全くだよ」

それまではにやかな話だったがそれが止まってしまったのだ。

第三章

「権太の奴、どうしてるんだかな」

「相変わらずらしいな」

「相変わらずか」

「ああ、相変わらずだつてな」

その権太という者のことも話されていく。

「相も変わらず酒に博打にな」

「あと女か」

「勘当されてもそんな調子だよ」

とりあえずこの権太は好意は持たれていないことがわかる。

「遊んで迷惑ばかりかけてな」

「昔からそんな奴だつたけれどな」

「ありやどうしようもないな」

評判はこういった有様だった。

「たまに帰つて来たらおかみさんから金せびつてるしな」

「そんな奴は早く死んじまえばいいんだけれどな」

「全くだぜ」

こうした話が為されるのだった。そうしてそんな時に店の中ではその弥助がお里と共に店仕舞いにかかっていた。しかしそこにある者がやって来た。

「よお、久し振りだな」

「えっ、兄さん!？」

お里は彼の顔を見て思わず驚きの声をあげた。可愛らしい顔が彼の顔を見たことで強張ってしまった。見れば小金吾に絡んでいたあの男だ。

「どうしてここに」

「どうしたもこうしたも御前には関係ねえよ」

顔を強張らせる妹に対して悪びれず返す。

「それよりだ。そっちの若いのよ」

「私ですか？」

「あ、そうだよ」

弥助を見ての言葉であつた。

「あんたの顔な」

ここで懷から人相見を取り出しちらりと見る。それからまた弥助の顔を見て確認する。そうして納得した顔でにんまりとするのだった。

「やっぱりな」

「やっぱり？」

弥助は穏やかな調子で彼に返した。

「何かあつたのですか？」

「いや、別に」

弥助の問いには答えなかつた。

「何もないさ。それより親父は何処だ？」

「お父さんがどうかしたの？」

「親父がいたら何かと面倒だからな」

ふてぶてしい調子で妹に返すのだった。

「だから聞いたんだよ」

「勘当されたのは兄さんが悪いんじゃない」

お里は怒つたような声で兄に返した。

「だからそんなにこそそそとして」

「悪いのかよ、それがよ」

「どうせあれでしょ？お金でしょ」

今度は忌々しげな調子であつた。

「お金が欲しくて来たんでしょ」

「へっ、御前には関係ねえ話だよ」

やはり悪びれたものであつた。

「わかつたら早くお袋呼んで来い。いいな」

「そんなことばかりしていたらそのうち罰が当たるからね」

そうは言っても弥助と共に店の中に入り母親を呼ぶお里であつた。それから暫くして兄は金を受け取り意気揚々として店を後にしようとする。ところがであつた。

不意に物音が聞こえた。それで慌ててその受け取つた金をそこにたまたまあつた酢桶に隠すのであつた。そうして彼自身も物陰に隠れる。すると店に戻つて来たのはあの老人であつた。彼は店に入るとすぐに辺りを見回した。幸い誰もいなかった。それを見届けると懷から何かを取り出し酢桶の中に隠してしまった。それが終わるとすぐに弥助が店の中に戻つて来たのだつた。

「これは維盛様」

彼は弥助の姿を認めると恭しく一礼してから述べた。

「どうされたのですか？」

「弥左衛門、その名はここでは」

弥助は維盛という名前を出されると警戒する顔になつて彼に告げた。

「何時何処に源氏の者が」

「それどころではないのです」

しかし弥左衛門はそれでも恭しい態度を崩さず言つのだつた。

第四章

「源氏の者がこの辺りにも来たのです」

「何っ、源氏の者がか」

「はい、梶原景時がです」

「梶原景時がか」

維盛はその名を聞いて流麗なその顔を曇らせた。

「頼朝の腹心であるあの男が」

「最早猶予はありません」

弥左衛門の声にそれがはつきりと出ていた。

「維盛様、ですから」

「わかった。それではだ」

維盛もそれを聞いて頷く。

「一刻も早くここを去ろう」

「既に隠れる場所は用意してあります」

弥左衛門はその年老いた顔をあげて維盛に告げる。未れば皺が目立つがよい顔をしている。まっすぐに生きた男の顔をしていた。

「ですから御安心下さい」

「その場所とは？」

「上市村の私の隠居場です」

そこだというのである。

「そこにお隠れ下さい」

「上市のか」

「はい、そうです」

また語る弥左衛門であった。

「ですから今すぐにでもそこに」

「わかった。それではだ」

「思えばです」

ここで弥左衛門は語りはじめた。

「重盛様が宋の育王山に寄付する時のことでしたな」

「弥左衛門、そのことはだ」

維盛は彼が話そうとするのを止めさせようとした。

「私には関わりのないことだ」

「いえ、あります」

しかし彼はこう言うのであった。

「重盛様は維盛様の御父上ではありませんか」

「それはそうだが」

「それでどうして関わりがないと言えましょう」

重盛は平家の嫡男であった。棟梁である清盛が最も信頼し頼りとする者でもあった。成り上がり者であるが故に評判の悪い清盛を宥める役目を果たしていたのだ。

実際のところ平清盛は実に人柄のいい男であった。決して残虐でも傲慢でもなかった。その人柄は温厚であり身分の低い者にも優しくかった。源氏が一族同士で殺し合いを続けていたのに対して彼は一族を非常に大事にした。また人の苦勞も知る人物であった。

その清盛を支えてきたのが重盛であったのだ。維盛はその嫡男なのだ。

「私がその役割を仰せつかわり」

「しかし音戸の瀬戸だったか」

「はい」

海賊が多く出た場所である。瀬戸内は非常に海賊が多い場所でもあった。藤原純友もそうであったしこれより後の戦国時代もそれは同じであった。

「そこでその銭を奪われ責を取り腹を切ろうとしたところ」

弥左衛門の声がうわずつてきた。心が抑えられなくなってきたように。

「そこを助けて下さったのが重盛様だったではありませんか」

「あれは父がしたことだ」

だが維盛はあくまでこう言うのであった。

「私ではない」

「いえ、それでもです」

弥左衛門の言葉は続く。

「私には恩があります」

「だから私を助けてくれるのか」

「その通りです。ですから早くお逃げ下さい」

再び維盛に逃亡を進める。

「追っ手が来ないうちに」

「わかった。それではだ」

「後で娘も行かせます」

お里のことも忘れてはいなかった。

「では今すぐに」

「よし、では」

維盛は弥左衛門の言葉を遂に受けた。そうして今まさに店を発とうとした。しかしその時だった。

不意に店の玄関の扉を叩く音がしてきた。二人はその音を聞いて顔を見合わせる。

「まさか」

「追手が!？」

強張った顔でその可能性を考えた。今はそれを考えてもおかしくはない状況だった。だがその危惧はこの時は幸いにして外れたのであった。

「若し」

「!？この声は」

「女の声ですな」

「うむ、間違いない」

維盛は弥左衛門の言葉に対して頷いた。

「では追手ではないか」

「いえ、それはまだわかりません」

弥左衛門はあくまで慎重であった。

第五章

「女といえどもです」

「そうか。油断はならないか」

「御願います」

「ここでまた女の声がしてきた。」

「一晚泊めて下さい」

「一晚!？」

維盛も弥左衛門もここで首を傾げさせた。

「今一晚と言ったな」

「はい、確かに」

「ここは宿ではないが」

「このことに首を傾げさせる維盛であつた。」

「若し追手ならそれがわからない筈がないが」

「その通りです。では追手ではないのでしょうか」

「そうだな。来ているのは梶原景時だ」

維盛はその名前を出した上で顔を曇らせてみせた。

「そのような迂闊な者は連れては来ない」

「ではやはり普通の旅の者でしょうか」

「おそらくはな」

「こつ察する維盛であつた。」

「それで間違いないだろう」

「では私が出ましょう」

「いや、私が行く」

維盛は弥左衛門が行こうとするのを止めて自ら行くと言つのだつた。

「ここはな。行かせてもらつ」

「維盛様がですか」

「うむ。それではな」

「はい。では御願います」

こうして維盛が出るようになった。そうして玄関の扉を開けてま
ずはこう話した。

「うちは寿司屋でして」

言いながら扉を開ける。

「宿屋ではないのですが」

そうしてその旅の者を見る。見れば。

「何っ、その方等は!？」

「これは………維盛様!？」

「父上!？」

見ればそれは若葉と六代であつた。三人はそれぞれの顔を見て驚
きを隠せなかつた。

「どうしてこの様な場所に!？」

「まさかここで御会いできるとは」

まずは夫婦で言い合うのだった。

「私を探していたというのか!？」

「身を隠しておられたのですか」

そうしてすぐに互いのことを察してしまった。

「それでここまで」

「このお店で」

「何ということだ」

「しかしここで御会いできるとは」

そのうえで再会を喜ぼうとした。ところがここで。

「弥助さん」

「むっ!？」

お里が来たのであつた。彼女は何も知らず維盛達のところに来た。

「どうしたんですか?お父つつあんが心配してますよ」

「お里………」

「!?!その娘は」

女の勘であつた。若葉はお里の姿を見てすぐに彼女が何なのかを

悟ってしまった。

そうしてそのうえで。維盛に対して言うのであった。

「維盛様の」

「そうだ」

そして維盛も隠さない。あえて正直に話した。

「ここでのな」

「そうでしたか」

側室を持つことは普通である。若葉もそれは承知している。だからこそそれを聞いただけで納得して頷くのだった。彼等の間はそれで済んだ。

しかしであつた。お里は。維盛のことを知りここで。啞然としてしまいそのうえで言うのだった。

「弥助さんではなかったのですね」

「済まない」

維盛は沈痛な顔でお里の言葉に答えた。

「止むを得なかった。隠さなくてはな」

「それはわかります」

平家の貴人ならば当然である。今源氏の追手が各地に放たれているからだ。

だがそれでも納得できないことがあつた。それはお里が自分と維盛を見てそのうえで。感じざるを得ないこと、即ちどうしようもないことであつた。それは。

「貴方様がそれ程貴い方だと知っていれば」

「知っていれば私を愛さなかったか」

「はい」

そういうことであつた。

「何と大それたことを」

「済まない」

維盛はまたお里に謝った。

第六章

「そなたには何と言っても足りない。だが」

「ですが仕方のないことですな」

ここでお里も納得できるようになってきた。涙を流しているうちにその涙が彼女の心を冷まして穏やかなものにさせたのであろうか。

「これもまた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今は維盛は何も言うことができなかった。そのまま沈黙が場を支配しようとしていた。しかしであった。ここでまた扉を叩く音がしてきた。

「誰かおられるか！」

今度は威勢のいい男の声であった。

「梶原様が来られるぞ！」

「何っ、梶原が！？」

「梶原景時が！」

維盛達はその名を聞いて我に返った。お里もまたすぐに涙を拭いて顔をあげそのうえで。維盛達に対して慌てて告げるのであった。

「皆様、ここは」

「う、うむ」

「落ちないといけませんね」

「そうです」

こう維盛達に対して告げるのだった。

「一刻も早く上市村に」

「わかった。それではな」

「この御恩、忘れません」

維盛達はお里に別れを告げそのうえで裏手から店を出た。お里がそれを見送る。しかしここで彼女の後ろにあの男が立っているのがあった。

「おい、聞いたぜ」

「兄さん!？」

「あれは平維盛一家だな」

「違うわ」

兄の素行を知るお里はそれは隠した。若しそれを知れば彼が何をするかわからないと判断したからだ。少なくとも彼女は兄をそうした人間だと思っていた。

「あの人達はただの旅人よ」

「へっ、そんなこと言っても無駄だぜ」

しかし権太はわかっていた。にやにやと笑いながら妹に返すのだ。
った。

「もうわかってるからな」

「わかっていたらどうだっていうの？」

「いい金になりそうな話だな」

そのにやにやとした笑みでまた言ってきた。

「これはな」

「ちよつと兄さん」

行こうとする兄を何とか止めようとする。

「それだけは」

「うるせえよ」

袖にしがみついていた手を払いのけてしまった。

そしてそのうえで酢桶を手にとって。店を後にする。彼が行った後で入れ替わりに弥左衛門が来た。彼は娘の表情が穏やかでないのを見てすぐに彼女に問うた。

「どうしたんだ、一体」

「あつ、お父つつあん」

その蒼白の顔を父に向ける。彼はその顔を見てさらに不吉なものを感じた。

「ちよつと」

「ちよつとも何もない」

不安になった顔で妹に返す。

「一体どうしたんだ？」

「弥助さん……いえ維盛様ですが」

まずは彼の話を話したのだった。

「奥様と御息が来られまして」

「何っ、ここですか！？」

「はい。しかも今玄関に梶原様の手の者が来られまして」

「何ということだ」

弥左衛門はそこまで話を聞いてその不安な顔を蒼白にさせた。

「それで維盛様達はどうされたのだ？」

「上市に逃げられました」

お里はこのことも父に話した。

「けれどそれを兄さんが」

「権太がか」

弥左衛門の身体が震えだした。その名前を聞いて。

「あいつ、一体何処まで悪事を重ねれば気が済むのか」

「どうしよう、それで」

「あの親不孝者めが」

まずは己の息子を忌々しげに罵った。

「最早勘弁ならん。今度会った時が最後だ」

そう決意したその時に店に風格のある壮年の男が入って来た。弥左衛門もお里もその男の姿を見て彼が誰かすぐにわかったのだった。

第七章

「貴方は」

「梶原様ですか？」

「左様」

男は彼等の問いに対して堂々と答えた。その後ろには多くの者達が従っている。

「それがしが梶原景時だ」

「そうですか。それで一体何の御用で？」

「白を切ろうとしても無駄だ」

まずはそれは防いだ景時だった。

「この家に平維盛を匿っているな？」

「いえ、それは」

「隠しても無駄だ」

続いて言い逃れも防いだ。そうしてそのうえで弥左衛門を追い詰めていく。

追い詰めながら彼は。さらに弥左衛門に対して問うのであった。

「いるな」

「.....」

弥左衛門は今は答えられなかった。だが最早沈黙は何の意味もなかった。

景時はさらに言ってきた。沈黙していても。

「すぐに引き渡せ」

「わかりました。それではです」

ここであの酢桶を差し出すのだった。

「隠し通すことはできないと思い」

「どうしたのだ？」

「この中に首があります」

彼は言うのだった。

「首を切つてここに」

「そうか。では貰い受けよう」

「はい」

こうしてあの酢桶の中の首が引き渡される。景時の周りの者達がまずその酢桶を確かめる。しかしその中であつたものは

「！？何だこれは」

「錢ではないか」

中であつたのは錢であつた。先程権太がせびり取つたあの錢である。皆その錢を見て驚きを隠せなかつた。

「賄賂か！？」

「いや、違う」

景時は周りのその言葉は否定した。

「話に聞くとこの店の主はそのような者ではない」

「左様ですか」

「まことに首がある筈だ」

景時もそれはわかつた。

「しかし何処にそれが」

「首ならここです」

ここでその権太が酢桶を持って出て来た。

「ほら、ここに」

「おお、確かに」

景時は権太がその酢桶から出して来た首を見て頷いてみせた。

「それこそまさに維盛の首だ」

「それだけではありませんよ」

権太はさらに言うのだった。

「ほら、ここに」

「むっ！？」

「なっ・・・・・・・・！」

息子が店の奥から引き出してきた二人を見て。弥左衛門は絶句してしまつた。

何とそこにいたのは若葉と六代だった。二人共既に縛つてありしかも猿轡までさせられている。何の為に縛られているかは最早明白だった。

「あなた、あれは」

「何という奴だ……」

弥左衛門は隣に来ていた年老いた女房の言葉に血が滲む言葉で応えた。

「我が子とはいえ……」

「ここまで人の道を離れていたなんて」

「許せん……」

遂に弥左衛門の心が切れた。

「こうなつては最早」

「よくやつたな」

景時はそんな彼等には気付かず権太に対して労いの声をかけていた。

「褒美としてこの者達を匿っていた父の罪を許そう」

「そんなのどうでもいいですよ」

権太はここでも外道だった。少なくともそうは見えた。

「それよりも褒美ですよ」

「そうか。それが欲しいのだな」

「当たり前でさ」

下卑た笑みでこう応えるのだった。

「それが目当てだからな」

「何という男だ」

「全くだ」

そんな彼を見て景時の後ろに控えている者達も顔を顰めさせてひそひそと言ひ合つた。彼等から見ての今の彼は目に余るものがあった。

第八章

「この様な者に捉えられた若葉殿達も不憫な」

「維盛殿も浮かばれまい」

「これをやろう」

景時はあえてかそんな彼等を制止せず、またその目にこれといって表情を見せることもなく。ここで一枚の陣羽織を出してきたのだ。つた。

「これをな」

「それは何ですか？」

「これは恐れ多くも頼朝公のものだ」

「というたまさか」

「そう、そのまさかだ」

こう権太にも述べた。

「これを鎌倉に持つてくれば何時でも金銀をやるう」

「へえ、それはいい」

権太はそれを聞いてさらに機嫌をよくさせていた。

「じゃあ貰っておきますね」

「そうするといい。それではだ」

景時は周りの者達に若葉と六代を捕らえさせた。そうして二人を連れて行き自分も店を後にするのだった。後に残ったのは弥左衛門の一家だけだった。

「あんた」

「お父つつあん」

「わかつておる」

弥左衛門は怒りに震えながら女房と娘の言葉に応えていた。

「最早許してはおけん」

「それじゃあやっぱり」

「ここで」

「そうじゃ。権太」

その声で息子に声をかけた。

「最早許してはおけん」

「ああ！？何だつてんだ？」

「死ね！」

懐にあった刀、あの小金吾の首を打った刀を取り出してそれで突いたのだった。権太はそれを腹に受けてそのまま倒れ込んでしまった。

弥左衛門はまだ許そうとはしない。なおもその刀を振りかざして言うのだった。

「維盛様の仇、ここで」

「待つのだ、弥左衛門」

しかしであった。ここで聞き慣れた声が店の中に入って来たのだった。

「私は無事だ」

「！？その声は」

「まさか」

「そうだ、私だ」

店の中に入って来たのは維盛であった。何と若葉も息子の六代も一緒である。

「若葉様も六代様も！？」

「じゃああの二人は一体」

「偽者なんだよ」

権太は倒れ込み虫の息の中で言った。

「あれはな」

「偽者！？」

「じゃあ誰なのかしら」

「まずあの首はな」

彼はそこから母と妹に対して話すのだった。

「あれだよ。酢桶にあった首な」

「あの首か」

弥左衛門はその首の話を聞いて合点がいった顔で頷いた。

「あの首のことか」

「そうさ。あの首が誰のものは知らなかったけれどな」

「あれはわしが取った首だ」

ここで弥左衛門はこう告白したのだった。

「店に帰る途中で倒れていた若いお武家様の首を申し訳ないとは思
いながら」

「私の身代わりにする為にか」

「はい」

今度は維盛の問いに対して答えたのだった。

「それで止むを得なく」

「まさかその首は」

若葉はその話を聞いて顔を曇らせて言った。

「小金吾では」

「そうかも知れやせんね」

権太は彼女の言葉に対して答えた。

「あの団子屋で御会いたお武家様にそっくりでしたから」

「じゃあやつぱりあの首は」

「小金吾……」

「それでその首を見てやったんでさ」

若葉と維盛が小金吾のことを悼む中でさらに話すのだった。

「前髪を剃り落とし維盛様の首にしたて」

「それだったのか」

「ああ、そうさ。それでな」

父の言葉に應えてさらに話していく。

「俺の女房と子供を若葉様と六代様の身代わりにしてな」

「馬鹿な、それなら何故」

弥左衛門はここまで話を聞いて我が子に対して問うた。

第九章

「早いうちに言わなかったんだ」

「俺は今まで悪いことばかりしていたからな」

彼は父の問いに対してこう返した。

「それで皆に迷惑ばかりかけていたからせめてと思って」

「それでだったのか」

「今ここで何とか真つ当なことがしたくなつてな」

だからだというのだった。

「親孝行だと思つてな」

「この馬鹿息子が……」

弥左衛門はその我が子の手を持って泣いていた。

「その気持ちは何故今ここで……」

「全くだよ、それなら本当に」

母も嘆くばかりであった。

「こんなことにならなかったのに……」

「そして維盛様」

権太は蒼白になりながら手に持っているその陣羽織を維盛に差し

出したのだった。

「これですが」

「それは？」

「頼朝の陣羽織でございます」

それを彼に差し出したのだ。

「どうかこれで恨みをお晴らし下さい」

「わかった」

維盛はその彼の心を受けた。そうして懷から小刀を出して切り裂いた。すると。

その中からあるものが出て来たのだった。それは。
「数珠!？」

「それに袈裟!？」

どちらも仏門のものであった。

「これは一体……」

「どういうことで!？」

「そうか」

驚く一同の中で維盛はこの数珠と袈裟の意味を悟ったのだった。

「出家せよということだ、この私に」

「出家!？」

「それはまたどうして」

「命だけは助けようというのだ、この私を」

「維盛様をですか」

「そうだ」

こう周りに答える維盛だった。

「そういうことだ。それが頼朝の考えなのだ」

「頼朝の」

「どうしてあの男が」

「弥左衛門と同じだ」

彼は今度は弥左衛門の名前を出すのだった。

「かつての平治の乱で頼朝は捕らえられ処刑されるところだった」

「はい、確かに」

「あの時は」

このことは誰もがよく知っていた。平治の乱で源氏と平家は争った。だが源氏は敗れてしまい棟梁である義朝は殺され頼朝も捕まっていたのだ。清盛は彼を処刑しようとした。

しかし彼の義母や息子である重盛にそれを止められたのだ。そうして彼を東国に流罪とした。他には義経も助けられている。

「それではその時の恩をここで」

「重盛様の御子息である維盛様を」

「そういうことだ。頼朝はわかっていたのだ」

維盛もこのことを全て察したのだった。

「全てな」

「それでは」

権太はそれを聞いて彼もまた察したのだった。

「梶原景時も俺の女房と子供なのを承知で」

「そうだ」

維盛は愕然とした顔になるその権太に顔を向けて告げた。

「おそらく今は放たれているだろう」

「無事か。しかし」

しかしだった。権太は思うのだった。

「それじゃあ俺がやったことは」

「権太・・・・・・・・・・」

「兄さん・・・・・・・・・・」

「しかし。こんなものかもな」

だが権太は自嘲してこう呟いた。

「悪党の末路なんてな。今までの悪事の因果応報さ」

「どうしてこんなことに・・・・・・・・・・」

母は今事切れようとする彼の傍で涙するだけだった。権太は倒れ込み父に抱きかかえられながらゆっくりとその目を閉じるのだった。

この後維盛は出家して高野山に向かった。世の無常を感じた彼は以後死ぬまで権太の菩提を弔った。全ては無常、さながら春に散る桜の花である。

いがみの権太

ゝ義経千本桜よりゝ

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8777h/>

いがみの権太 ~ 義経千本桜より ~

2010年10月8日15時04分発行